

入選 小学生の部

心を救う一言

菊川市立堀之内小学校 五年

新井 陽菜

私は友達を作るのが得意だ。それは一つの小さな親切から始まった。

「二年生になったら、友達百人できるかな」そんな期待に胸をふくらませた入学式。その一ヶ月後の教室で、私はひとりぼっちだった。

元々、私の通っていたこども園から同じ小学校に来た子は私だけで、友達は0人だった。その上、入学式後からはコロナによる緊急事態宣言で一ヶ月の休校。五月になっても友達が0人。入学式の時に抱いていた期待も失い、不安な気持ちでのスタートとなってしまった。

教室では、みんなマスクをし、あまり話をしないような気を配っている。今までどう

やって友達を作っていたのかも分からない、このまま私は六年間一人ぼっちなのではないかとも思えた。そんな私を救ってくれたのは、今でも私が一番大好きな友達だった。

私を救った一言は、今となっては何を言われたかとも思い出せない。あいさつだったかもしれないし、好きなキャラクターを聞かれたのかもしれない。そんなささいな一言だった。けれど、私に一番に声をかけてくれた、その事実は、五年たった今でも心に大きく残っている。その子が声をかけてくれたことをきっかけに、私は他のクラスメイトとも話すことができるようになり、今では学年全員が友達だ。その子にとっては声をかけるといことは、あいさつ程度の小さな親切だったかもしれないが、私にとってはとても大きくかけがえのない思い出となっている。

私は、新しい場所に行った時、新しい人と出会った時、できる限り自分から声をかけるようにしている。今でも、初めて声をかけるときは緊張するし、何を話そうと考

えることもある。きっと他にも同じように緊張し、話しかけたくても話しかけられない子もいるだろう。一年生の時の私のように孤独や不安を感じている子もいるかもしれない。そんな時は私が少し勇気を出して声をかける。この少しの勇気が私にとっての小さな親切だ。そうやって自分から声をかけるようにしていいたら、初めての場所でも友達ができるようになり、私は友達を作るのが得意になった。

私達の生活は小さな親切であふれている。「おはよう」「ありがとう」「大丈夫?」口に出すのが照れくさかったり、緊張することもあるだろう。しかし、その一言が誰かを救う一言になることもあると、たくさんの人に知ってほしい。

今の私はたくさんさんの友達に囲まれている。この作文を通して、小さな親切は、自分に向けた親切でもあるということに気がついた。これからも私は、自分にも人のためにもなる小さな親切の一言を、言い続けていきたい。

助け合いの心

袋井市立笠原小学校 六年

大津 桃葉

私が京都に行ってバスに乗った時、海外から旅行に來ている黒人の男性が席に座り十秒位ですぐに立ったので、「どうしたのだろう?」と思っていると、高齢の女性に席を譲っていました。私は、男性も海外から旅行に來ていて疲れているだろうに、席を譲っていた事にとてもしつくりしました。席を譲ってもらった女性は、笑顔で「ありがとうございます。」と言っていました。男性に伝わったかは分かりませんが、二人共笑顔でした。それを見た私は、「言葉の壁なんて全然関係ないな。」と思いました。

私はバスではなく電車で、一度子供を連れていた女性の方に席を譲ったことがあります。その時に笑顔で「あり

がとうございます。」と言ってもらえた時に、とても何かを成し遂げたような気持ちになりました。その時はこちらまで笑顔になっていました。私は、今まで席などを譲ってもらったことが多かったのですが、これからは私が席などを譲る番だと思っています。

他にも私は、こんな出来事に出会いました。私が東京に旅行に行った際、電車で子供のためにお菓子を開けたら、中身を床にこぼしてしまったお母さんがいました。周りの人達はそのお菓子を拾っていて、お母さんが申し訳なさそうに「すみません、ありがとうございます。」と言っていました。でも周りの人達は、みんな笑顔で「しょうがないよ、大丈夫、大丈夫。」と返していました。私は少し遠くに居て一緒に片付けをすることはできませんでしたが、その場はとてもほっこりとしていて、とても良い空間になっていました。

これからも私は色々な人に迷惑を掛

ける事が何度もあると思います。逆に他の人が困っていて、それを手助けする立場になることも何度もあると思います。自分だけが迷惑を掛けるのではなく、周りで困っている人が居たら、笑顔で「大丈夫。」などの相手が安心する言葉を忘れずに掛けること。助けてもらった相手には、「すみません、ありがとうございます。」と感謝の言葉をしっかりと口にして伝えることが大切なのです。私は、今後「ありがとう。」の言葉や困っている人を助ける人が沢山増えてほしいと思っています。そのためには、一人一人の思いやりの心が必要です。自分が持っている思いやりの心で困っている人を笑顔で助ければ、助けてもらった人も笑顔になって全員が笑顔になれる。そんなすてきな世界になっていけば嬉しいですね。



入選

電車の席

浜松市立白脇小学校 六年

河原崎 綾太

ぼくはお父さんとジュビロ磐田の試合を観戦しに行きました。前半はPKで一点リードされていましたが、なんと逆転して勝利しました。

その後試合が終わり、お父さんと電車に乗って帰っていました。しばらくすると、おばあさんが、電車に乗ってきました。ジュビロの試合があったこともあって、電車内は満員で立っている人も多く、とても座れる状況ではなくて、ぼくたちも座れただけラッキーでした。そのような状況の中で一人の女の人が、

「おばあちゃん席に座りな。代わるから。」

と言って席をゆずろうとしました。すると、

おばあさんは、

「いいよべつにつらくないから。」

と言って遠くよしました。その後も女の人

はおばあさんがつらそうなのを見ると、ゆ

ずってあげようとしていました。

それを見てぼくは、女の人の行動も素晴らしいと思いました。それに席をゆずってもらったおばあさんもちゃんとその礼を伝えていたのでいいなと思いました。

ぼくはあまり電車に乗らないので、席をゆずるなどという経けんはありません。席をゆずるということはとても難しく、勇気がいると思います。でも言うだけでは意味がありません。だから、もっと色々なことに挑戦して、勇気と自信をつけるように自分自身を成長させて、実践したいと思いました。

でも余計なお世話ということもあります。家族がいるからみんなで座れないため、座らない、次の駅で降りるから座らない、荷物をたくさん持っているため、座らない、などの理由などがあって座りたくない人があるかもしれません。もし、ことわられても、しっかりと受けとめましょう。それができてやっと「親切」ができるのかもしれない。

これまで見てきた様に親切を成功させる

ためには、いろいろな方面から相手を見て最ゼんの行どうを行うことが、大切でした。

これからは、これらのことを意識して生活していきたいです。それにプラス、他の人にもこの「親切」をすすめてみんなにもやってもらいたいと思いました。なのでまず自分がすんで、これを実行して成功させていきたいです。

わたしが出来た親切

浜松市立広沢小学校 三年

工藤 綾乃

みなさんは点字ブロックを見たことはありますか。わたしは、まちの歩道やえきなどでよく見かけます。「点字ブロックって何。」という人もいます。点字ブロックは、目の見えなくなってしまう人、目の見えない人が足のうらでさわった感かくで分かるように表面にでこぼこをつけた物です。目の見えない人が安全に動けるように地面かゆかにせっちされています。今では、

歩道、えき、公きようしせつだけでなく、お店の出入口近くなどにも広くせつちが進んでいます。

買い物に行ったときに、点字ブロックの上に自転車がおいてあったことがありました。「目の見えない人が通ったらこまりそうだな」とわたしは思いました。なぜかというと、目の見えない人は、赤色と白色のついで「ここは本当に進んでいいのかな。」とかくにんをしたいと思います。そのときに自転車などのしょうがい物がおいてあると「ここはもう進めないのかな。」と、思ってしまったからです。なので、わたしは点字ブロックの上にあった自転車を点字ブロックのない所に動かしました。それを見ていた母が「どうして自転車を動かしたの。」とおどろいたように聞きました。「目の見えない人は、どこに何があるかわからないからしんちょうにゆっくり進むけどまちのじょうほうを知らせてくれるでこぼこがつづいてはるはずなのに自転車などのしょうがい物があると『こまったな。前に進みたいんだけどな。』って思いかも

しれないと思ったからだよ。」とわたしは、言いました。それを聞いてた母が「あなた、点字ブロックなんてよく知っているね。いいことをしたね。」とほめてくれました。

わたしは、目の見えない人の気持ちを知らなくなりました。そこで、タオルで目をかくして、家の中を歩いてみました。家は毎日いるのでなれているけど、とくに曲るところとびらのあるところがこわかったです。なので、すぐに、タオルを外して自分の目で見てしまいました。でも、目の見えない人は、タオルを外しても見えないので、目の見えない人は「生活が不便なんだな。」とあらためて思いました。

また、目の見えない人用に作られている点字の絵本を読みました。点字をちよつとおぼえてから読んでみたけれど、絵が見えないと、イメージがふくらみにくかったです。いつも読んでいる絵本とくらべて、「絵がないと、物足りないな。」と感じました。本を読むことが大好きなのに、目からのじょうほうがないと、十分に楽しめないということが分かりました。

目の見えない人は、目の見える人くらべて、生活することが不便だと思えます。また、あぶないことがあっても気付きにくいと思います。だから、目の見えない人たちもまちを安心そして安全に歩くことが出来るように、わたしは、自分が出来ることをこれからもやっていきたいと思っています。

大きな消しゴム、小さな親切

焼津市立焼津東小学校 六年

小宮 一朗

まず最初に、私はフィリピン人です。まだ日本に来て、一年と八ヶ月です。私は日本に来てから心配と不安な気持ちでいっぱいでした。私が日本に来る前、日本について持っていたイメージが日本はとてもきれいな所で家や建物もきれいな所が多く、道路や歩道に大きなゴミが転がっていることもない素晴らしい国だと思っていました。また、日本にはいろんな食べ物や場所が多



く、楽しそうな国だとも思っていました。また、日本人については、大人や子供が優しくかったり、男の人はかっこよくて、女の人はきれいな人が多いのだと日本に来る前は思っていました。

実際に日本に来てから、私がイメーajしていた日本と同じ部分が多く、私がイメーajしていなかった日本のことについてもまた新たに知ることができました。そして、私は日本の小学校に入り、日本人の心の温かさを体感し、知りました。そのきっかけというのが「消しゴム」です。これは私が今年の六月ごろに体験したことです。私がいつものように学校の朝の会をしていて、筆箱の中を確認している時、ふと消しゴムがないことに気づいて、少しパニック状態になってしまいました。そこで、後ろの席の友達に消しゴムを忘れたことを伝えてみると、私に優しく「いいよ。」と言ってくれました。その時、私はやっぱり日本人は親切な人が多いと実感しました。私の母国であるフィリピンでは日本と少し違って「相手への親切さ」が少し足りない気がします。

例えば、ある人が道を歩いていて、財布を落としてしまったとすると、それを見ていた人がそのまま財布を拾って行ってしまうことが時々フィリピンではあります。その他にも、お店などで食べ物を買って出たおつりをお客さんに返さない人達がおり、そこからトラブルにつながってしまうこともあります。

このように、フィリピンでは相手のことを思いやる心が少し足りないと思います。私が日本に来てから、日本がとても思いやりのある国だと感じました。また、私が経験したクラスの友達が貸してくれた大きな消しゴムが日本人の親切な心や思いやりの心を表しているのだと思います。

最後に、私は日本に来てまだ間もないですが、日本について多くを学び、日本人がどのような人達であるかを知りました。また、私の母国であるフィリピンにはないことが日本にはあり、逆にフィリピンにはあり、日本にはないことを発見することができました。そして、消しゴムのような小さな出来事が小さな親切として相手を幸せな

気持ちにさせるということを実感しました。これから、私が小さな親切を経験したように私自身がその小さな親切を相手にしてあげ、相手がうれしく思ってくれるように努力していきたいです。

親切のバトン

浜松市立和地小学校 四年

鈴木 統伍

ぼくのすんでいる家は、小学校からはなれたところにあります。ゆっくり歩くと、三十分、速く歩いても、二十分ぐらいかかります。学校までの道は、急な坂があったり、大きな横だん歩道があったり、暗いトンネルがあったりして、きけんがたくさんあります。ぼくが一年生になる前、お父さんといっしょに何度も学校まで歩く練習をしました。けれど、一人で行くのはさみしいし、少し不安だなと思っていました。

ぼくが一年生になったとき、近所に住む三年生のお兄さんたちがいっしょに歩いて

くれることになりました。転んでしまったときには、ばんそうこうをかせてくれて、ほけん室にもつれてもらったりしました。鼻血が出てしまったときには、ティッシュをかせてもらったりしました。たくさん話しをしてくれたので、歩いていくのがとても楽しかったです。

ぼくが三年生になったとき、近所の一年生の子たちといっしょに学校に行くことになりました。一年生になったばかりの子たちは、お母さんとはなれるのがいやで泣いてる子もいました。ぼくは、自分が一年生だったときのことを思い出して、一年生たちにやさしくしてあげること決めました。じゅんぴがおそくなった子がいたら、したくができるまで、まってあげました。とちゅうで歩けなくなった子がいたら、手をつないで学校までつれて行ってあげました。一年生のお父さんが、ぼくの家に来て、「いつもいっしょに行ってくれて、ありがとう。」

と、おいしいともろこしをくれたとき、ぼくはてれてしまったけど、とてもうれし

い気持ちになりました。

次は、その子たちが新しい一年生といっしょに歩いてたすけたり、手伝ってあげたり、親切にしてくれればいいなと思いました。そして、リレーでつかうバトンのように親切がずっとつながって、みんなが楽しく安全に学校に行けるといいなと思いました。

小さな親切

浜松市立和田小学校 六年

鈴木 璃笑

休みの日に、母と妊娠中の姉と私の三人でホームセンターへお買物に行った時のお話です。

重い犬のエサをショッピングカートに乗せたかったのですが、三人共誰も持ち上げることができずに困っていました。

すると、通りかかった外国人の男の人が手伝ってくれました。私達だけでは時間をかけても絶対に乗せることができなかった

ので助かりました。私達三人はともうれしかったし、よい気持ちになりました。

日本人の多くは外国人に苦手意識を持っているとよく聞きます。その理由は、外国語を不安に思うことが多いそうです。今回助けてくれた外国人の人も日本語を話すことはできない様でした。

しかし、ジェスチャーや表情などで気持ちが伝わりました。最初から思いこまず関わることに挑戦してみると、想像していたよりも簡単に気持ち伝わることを知りました。言葉が通じなくてもまるで会話している様だと感じました。実際、私も外国人の人とお話するのはいままでも機会がなかったので少しこわかったですが、今回の親切にしてくれた人のおかげで外国人の人に対して苦手と思わなくなったし、もっとたくさんの人と関わってみたいと思いました。

さらに、日本人でも外国人でも、困っている人がいたら助けようという気持ちと困っている時に助けてもらえるとうれしいという気持ちは変わらないということを実感しました。



困っている人を見かけた時、声をかけることはなかなか勇気が出ず難しいです。今まで私は、電車でお年寄りに席をゆずったり道に迷っている人に案内したりと親切と聞いて思いうかぶような行動はしたことがありませんでした。しかし今回助けてもらってうれしく思った気持ちを絶対に忘れずにいたいと思います。

私も相手が女の人でも男の人でも、子供でも大人でも、日本人でも外国人でも困っている人に声をかけようと思いました。

勇気を出して、寄りそって

静岡市立千代田小学校 六年

中島 海結

私は、一人で市立図書館に本を借りるためにカウンターに並んでいました。すると、心が温まる出来事を見ることができました。

小学校低学年くらいの女の子が、図書館の地図を見ながらこまった顔をしていま

た。私は、その女の子を見て、「助けたいけれど、どうやって助けてあげれば良いんだろう」「本当にこまっているのかなあ、もし、声をかけても本当はこまっていなかったらどうしよう」という気持ちになっでしまいました。あと、もう少し勇気を出していれば、女の子に声をかけられたかもしれない。すると、市立図書館の職員さんが、

「何か、こまっていることがありますか、何でも言って下さい。」

と言っていました。職員さんに声をかけられた女の子は、

「夏休みに動物の絵をかきたいです。だから、動物がたくさんかいてある本を探しています。ここにありますか。」

と言いました。私は、この会話を聞いて、「職員さん、声をやさしくかけられてすごいな」「声を自分からかければ良かったな」と思いました。女の子に、やさしく声をかけていた職員さんは、女の子に、

「どんな動物をかきたいの。」

と、ゆっくりと分かりやすく声をかけなが

ら、女の子と、動物のことについて書いてある本だ方向向かってきました。

私は、この出来事を見て、勇気は必要だけれど、こまっているかもしれない人に声をかけるのは、とても大切ということが分かりました。また、不安な気持ちに、寄りそいながら、動いたり、話したりすることも大切だと分かることが出来ました。

これからは、あと少し勇気を出して、助けたり、行動をしていきたいです。こう思ったのは、今回、私が見た出来事は、あと少しだけ、勇気を出していれば、こまっていた女の子を、私が助けることができたかもしれないからです。

この出来事から学べたことを大切にしてい、友達や大人の方の良い所を、自分の力に、たくさん取り入れていきたいと思いました。

ありがとうの力

浜松市立豊岡小学校 五年

中平 陽哉

ぼくは五さいの時に、三方原町にひっこ

して来ました。その時となりに住む、おばあさんに会いました。最初は、あいさつだけだったけど、「陽哉くん、遊びにおいで。」と言われてよく遊びに行くようになりました。そしていつも遊びに行くと、ぼくのために、おかしやジュースを用意してくれています。そんな時いつも感しゃの気持ちがあります。そんな時いつも感しゃの気持ちをこめて「ありがとう」といいます。足があまりよくないのに、重たいジュースなどの買い物に行ってくれるおばあさんのことを考えると、本当に自然と「ありがとう」が出てきます。

ぼくと弟が帰る時間になると、おばあさんは「もうこんな時間か、あしたも来てね」と言っ、げんかんまで送ってくれます。

ある時ぼくは習い事がいやで、ずる休みをしておばあさんの家に行ったことがあります。

ます。

その時、いつもやさしいおばあさんに初めて注意されました。いつものようにやさしく遊んでくれるかと思っしたのでおどろきました。が、ぼくのために注意してくれたことに気付いて、習い事に行こうと決めました。

ある日、おばあさんが家で転んで、ほねを折ってしまいました。そのことに気づいた、ぼくのお母さんが、救急車を呼び、おばあさんは入院して、手じゅつをすることになりました。ぼくはとても悲しくて心配でした。

家族みんなでどうしたらおばあさんを元氣付けられるか考えて、千羽づるを折ることにしました。家族みんなで毎日夜まで折っていました。そして千羽づるが、かんせいし、弟や妹、そしてぼくの写真をはった色紙といっしょにわたしました。ぼくができることは、千羽づるを作ったり、手紙を書いて送ることくらいしかなかったけど、おばあさんはよろこんで返事を書いてくれたり、電話をかけてくれたりしました。

おばあさんの入院中は、とてもさみしくて、弟や妹も同じ気持ちだったのか、いっしょに絵のプレゼントをかいいたり、電話したりすることが多くなっていきました。そしてついにおばあさんが退院しました。退院してすぐに、ぼくの家に来てくれたおばあさんは、「陽哉くんや弟くん妹ちゃんぐれた手紙や色紙を見て、手じゅつもがんばれたよ。本当にありがとうね。だからものにするわ。」と泣いて言ってくれました。ぼくは、おばあさんの手じゅつをして治すことはできないけど、ぼくたちの気持ちで治すことに協力できたのかもしれないです。なぜなら、おばあさんの退院は予定よりかなり早かったそうです。それほど、ぼくたちが作った千羽づるや手紙には不思議なパワーがあつたようなのです。とても大変で心配な出来事でしたが、ぼくとおばあさんはもっと仲良くなれたと思います。これからも、「ありがとう」の力で大切な人たちを笑顔にしていきたいです。



入選